

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 辻 大和

本論文は、16世紀末から17世紀前半にかけての時期を対象として朝鮮王朝の対明および対清貿易政策の推移・展開過程を考察したものである。

本論文が主たる対象とする17世紀前半は、周知のように中国において明から清へと王朝交代がなされた時期にあたる。朝鮮王朝はその前半期においては明、後半期においては清とそれぞれ冊封関係を結び、外交・貿易をおこなったが、明清交代期である17世紀前半は、ちょうどその過渡期に相当することになる。しかも1628年以降、明と断交して清と冊封関係を結ぶことになる1637年までの間、朝鮮の貿易相手国は明・清（およびその前身の後金）双方であった。明清交代という東アジアの変動期における朝鮮王朝の対明・対清貿易はいかに推移・展開し、そこにはどのような特色がみられるのか、またそれは朝鮮王朝側のいかなる政策的意図に基づくものなのか、といった点を解明することが本論文の主題である。

まず対明貿易については、16世紀末に従来の朝貢貿易に加えて新たに始められた国境地帯での互市形態の貿易である中江開市が1613年に廃止される過程とその理由（第一章）、壬辰丁酉倭乱（1592-98）後一時杜絶していた朝鮮の対日貿易再開とそれに対する明の関与をめぐる問題（第二章）、対明貿易において主要輸出品とされた薬用人蔘の朝鮮国内での流通過程や朝鮮王朝政府によるその管理政策（第三章）、後金の勃興により明への使行路が従来の陸路から一時海路に変更されたことにともない生じた朝貢貿易における変容と朝鮮王朝の対応策（第四章）などが取り上げられる。また対清（後金）貿易については、丁卯胡乱（1627）後に朝鮮と後金との間で結ばれた盟約に基づき始まった対後金貿易に対する朝鮮王朝政府の姿勢・対応（第五章）、明との断交により対明貿易が停止した1637年から明が滅亡する1644年までの間における対清貿易の推移と朝鮮王朝側の貿易政策（第六章）などが考察される。

朝鮮王朝の対明および対清外交や貿易の制度・実態については、日本・韓国・中国それぞれの学界においてすでに多くの研究蓄積がある。しかし明清交代期である17世紀前半に焦点を合わせ、対明・対清貿易の両者を視野におさめた研究はこれまでほとんどなされていない。本論文はそうした研究史上の空白を埋めるとともに、対明・対清貿易における朝鮮王朝の主体的な動きとその背景を明らかにした点で評価に値する。また、朝鮮王朝にとっての朝貢貿易と互市の位置づけに関する考察は、互市の発展にともなう朝貢一元体制の崩壊という、近世東アジア貿易史における近年の研究動向に対して新たな議論の素材を提供するものとして注目される。

貿易政策をめぐる朝鮮王朝内部の政治的・経済的事情への目配りや、その他個々の論点のなかにはさらに掘り下げた考察が必要と思われるところもあれば、それらによって本論文の価値が大きく損なわれるとは思われない。よって本委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績として認めるものである。